

上顎左側犬歯の異所萌出（移転歯）を伴った叢生症例

○ 葉山康臣、尾崎正雄、秋本光子、本川 涉
福岡歯大・成育小児歯

【緒言】 演者らは、上顎左側犬歯が上顎左側第一大臼歯の近心まで転位し、頬側より萌出した症例を経験した。本症例に対して治療を行ったところ良好な結果が得られたので報告する。

【症例】 患児：11歳0ヶ月女児。口腔内所見：上顎左側犬歯が、第一大臼歯の近心頬側より萌出しており、第二小臼歯を口蓋側に移動させていた。また、上顎左側乳犬歯の残存が認められた。模型分析結果：歯列は上下顎共に鞍状型であり、スペース分析において、上顎で-1.4mm、下顎で-5.6mmの arch length discrepancy が認められた。頭部エックス線規格写真所見：下顎骨の後退および下顎前歯の唇側傾斜が認められた。臨床診断：上顎左側犬歯の異所萌出を伴う Angle I 級不正咬合、骨格性Ⅱ級、ハイアングル症例。処置および経過：上顎にリングアーチを装着後、左側第一小臼歯を抜歯し、パワーチェーンにて近心へ牽引した。犬歯の牽引が終了後に左側乳犬歯を抜歯した。上顎にマルチブラケットシステムを用い、上顎左側犬歯が歯列弓内に排列された後、下顎第一小臼歯を抜去し歯列のレベリングを行い、最後に上顎右側第一小臼歯を抜歯して上顎歯列のスペース閉鎖を行った。動的治療期間3年5ヶ月で処置を終了し、歯根の吸収等の異常は認められなかった。

【考察】 異所萌出に関する種々の報告を供覧すると、上顎犬歯における遠隔転位の症例は少なく、6の位置まで転位した異所萌出の報告は少ない。また、これらの症例では、抜歯により対応しており、遠隔転位した犬歯を治療した例はみあたらない。本症例のような移転歯を治療出来たことは貴重な経験であった。

症例報告

半埋伏及び埋伏第二大臼歯の直立矯正

○ 行成哲弘、松井貴志、品川浩実
（長崎小児歯科臨床医会）

【目的】 永久第一大臼歯の異所萌出はそのほとんどが上顎歯列に発現することが知られているが、一方第二大臼歯の埋伏は一般的に下顎歯列弓にその多くが発現する。今回、矯正臨床ジャーナル1986年2月号、海外エクスプレス「半埋伏大臼歯の直立矯正」で RANDRY LANG によって紹介された方法を基に私が工夫した牽引装置で直立矯正を行った4症例について報告する。

【対象および方法】 対象患者は4名、下顎半埋伏第二大臼歯を持つ患者が3名、下顎埋伏第二大臼歯を持つ患者が1名である。半埋伏第二大臼歯を持つ患者3名の内訳は左右側の患者が1名、左側のみの患者が2名となっている。埋伏第二大臼歯を持つ1名は左右側とも口腔粘膜下埋伏である。4名とも第一大臼歯遠心歯頸部へ第二大臼歯近心咬頭が接触し自然萌出は望めない状況にあった。RANDRY LANG により考案された牽引装置を改良し、使用した。

【結果】 4症例とも1～3ヶ月で半埋伏及び埋伏第二大臼歯を萌出させることができたが、その後歯列内誘導の必要がある症例もあった。

【考察】 永久歯列での咬合の完成には上下顎第二大臼歯までの完全萌出が不可欠である。叢生を伴う症例では今回取り上げた下顎第二大臼歯の埋伏を伴う場合が少なくない。今回報告した牽引装置は矯正治療中の場合でも、すでに装着している下顎第一大臼歯のBandに付与するだけで済み、有効な方法と思われる。multi-bracket systemが装着されていない症例でも、牽引による反作用が第一大臼歯に及ぼさないように注意する事により有効な方法と思われる。ただし、埋伏第二大臼歯の近心傾斜の度合いが強い場合には、後戻りする場合もあり、注意が必要である。